

保育所における発達障害に関する研修会・訪問支援の効果

佐山智洋* 新妻里紗* 桧上耕祐* 村上功二*
齋藤信哉* 永吉敏広* 佐藤千代子** 緒方明子***

Effects of workshop and consultation about developmental disabilities on teachers in nursery schools

Tomohiro SAYAMA*, Risa NIITSUMA*, Kousuke MATSUGAMI*, Kouji MURAKAMI*,
Shinya SAITO*, Toshihiro NAGAYOSHI*, Chiyoko SATO**, Akiko OGATA***

Abstract

This study aimed to reveal the effects of workshop and consultation about developmental disabilities on teachers in nursery schools. The workshop was on the characteristics of autism spectrum disorders and the methods of supporting children with developmental disabilities. The consultation included observing children and a briefing session. Questionnaires were used to measure the effects of the workshop and consultation on the teachers. Additionally, they sought information on the specialty skills of teachers, the difficulties faced by teachers, and the actual support. Results revealed that the teachers' knowledge of developmental disabilities and of special support, and actual support increased after the workshop and consultation. The results indicated that the workshop and consultation were useful to advance the support for children with developmental disabilities in nursery schools.

キーワード：保育者、専門性、困難さ、支援の実態

Key words : nursery teachers, specialty skill, difficulties, actual support

2016年6月24日 登録

2017年10月4日 採択

1. はじめに

近年の発達障害に関する動向として2005年に発達障害者支援法の施行、2007年に特別支援教育の本格実施と、10年ほどの間に大きな変化が起こっている。

このような変化は、発達障害に関する支援の必要性

の社会的認知が高まってきたことを表していると言える。

保育においては、障害のある子どもへの支援として、障害児保育が行われてきたが、このような発達障害に関する支援の高まりとともに、障害児保育における課

* 国立障害者リハビリテーションセンター自立支援局
秩父学園

** 秋草短期大学

*** 明治学院大学

* Chichibu-Gakuen Institution for Children with Intellectual Disabilities, Rehabilitation Services Bureau, National Rehabilitation Center for Person with Disabilities.

** Akikusa Gakuen Junior College

*** Meiji Gakuin University

題も変化してきている。

郷間^[1]によれば、障害児保育の課題は、従来「知的障害や自閉症についての理解や対応についての知識がないこと」「障害児について健常児にどう理解させるかわからない」といったことが主な課題であったが、最近では「軽度の発達障害の特徴を持つ子どもの問題が重視されるようになってきている」としている。さらに発達障害のある子どもを「気になる子」として捉え、「気になる子」は障害児よりも保育上の困難さが高く、「気になる子」に対する対応は大きな問題になりつつあると述べている。困難さの内容として、診断がついていないがゆえに理解および対応方法の難しさや人員不足があるとしている。

このように、発達障害の支援を行う上で困難さがともなうため、専門機関等が保育所を援助する必要性が高いと思われる。

なお、「気になる子」に関する研究は、本郷ら^[2]、平澤ら^[3]、久保山ら^[4]など多く見られるが、これらは発達障害のある子どもを含んでいると考えられ、本論文では、それらを発達障害の概念で捉えることとする。

さて、保育所保育指針では「専門機関との連携を図り、必要に応じて助言等を得ること」とされており、専門機関と連携が明記されている。

また発達障害者支援法においては、発達障害者支援センター等の役割として、「医療、保健、福祉、教育等に関する業務を行う関係機関及び民間団体並びにこれに従事する者に対し発達障害についての情報提供及び研修を行うこと」とされており、専門機関が保育所等に対して研修を行っていく必要がある。

また児童福祉法においては、保育所等訪問支援を定めて「障害児が集団生活を営む施設を訪問し、当該施設における障害児以外の児童との集団生活への適応のための専門的な支援その他の便宜を供与」することとしている。保育所等訪問支援には、「訪問先施設のスタッフに対する支援」を含んでおり、保育者に対しても指導を行うこととなっている。

このように、保育所における発達障害のある子どもへの支援の必要性の高まりの中、研修や保育所等訪問支援や巡回相談（以下、訪問支援とする）が行われてきているが、それらの効果については十分に明らかにされていない。

そこで本研究ではX市の2か所の保育所において研修会、訪問支援を実施した事例から、その効果の傾向について検討することを目的とする。

2. 方法

2.1. 対象者および倫理的配慮

対象者はX市内の保育所のうち、研究協力を得られたA・B園の2園に勤務する常勤の保育士とした。A園は設立2年目の私立の保育所で、3～5歳児では異年齢の縦割りのクラス編成であった。B園は設立して50年以上経つ公立の保育所で年齢別のクラス編成であった。

なお、本研究は国立障害者リハビリテーションセンター倫理審査委員会の審査・承認を得た後、各保育所の園長の同意を得た上で調査を実施した。

2.2. 調査方法

調査は質問紙を用いて行った。20XX年6月に事前調査（以下、1回目調査）を行い、研修会を7月上旬から9月上旬に行った後、研修会後調査（以下、2回目調査）を行い、研修会の効果を測定した。またその後、訪問支援を行い、訪問支援終了後の翌年3月に訪問支援後調査（以下、3回目調査）を行い、訪問支援の効果を測定した。それぞれの調査回を対象者と回答結果を一致させるために、対応表を用いて対象者を番号で把握した。匿名性を維持するために、調査者は対応表を閲覧せず、各園長が対応表を基に質問紙に記した番号と職員名を一致させる形で質問紙を配布した。回収は各園の事務室に回収箱を設置しておこなった。

2.3. 質問紙

質問紙は、以下の構成とした。

①フェイスシート

フェイスシートの質問項目は、保育所での役割（担任・主任、園長など）、クラス構成（何歳児クラス、異年齢、その他）、クラスで発達障害のある子どもの人数、クラスで発達障害の疑いのある子どもの人数、保育士歴、担任・担当した発達障害またはその疑いのある子どもの人数（0人、1～5人、6～10人、11～20人、21人以上）、年齢、性別、研修・勉強の経験（大学・短大等の授業、職員研修、自主研修など）で構成した。なお、フェイスシートは1回目調査のみで実施した。

②保育士の支援に関するアンケート

藤原^[5]を参考に、独自の内容を加えて項目を作成し、保育士の発達障害児の支援に関する専門性について調査することを目的とした。回答方法は、「1—全くあてはまらない、2—あまり当てはまらない、3—どちらとも言えない、4—少し当てはまる、5

一とても当てはまる」の中から、当てはまる程度を回答する5件法とした。

③子どもの行動・支援における困難さに関するアンケート

大塚^[6]を参考に、独自の内容を加えて項目を作成し、発達障害児の支援における困難さについて調査することを目的とした。回答方法は、「1—全く感じない、2—あまり感じない、3—どちらとも言えない、4—少し感じる、5—非常に感じる」の中から、当てはまる程度を回答する5件法とした。

④支援の実態に関するアンケート

保育所における支援に関する書籍(佐藤^[7];杉山・辻井^[8];内山ら^[9])を参考に、独自の内容を加えて作成し、保育所で行われている支援の実態について調査することを目的とした。項目に含まれる支援内容は2歳未満の子どもに行われることが少ないと考えられたため、2～5歳児の担任に限定し回答を依頼した。回答方法は、「1—全くあてはまらない、2—あまり当てはまらない、3—どちらとも言えない、4—少し当てはまる、5—とても当てはまる」の中から、当てはまる程度を回答する5件法とした。

2.4. 研修会の内容

研修会の内容は、1回目の研修会は、各園とも自閉スペクトラム症の子どもが在籍していることから、自閉スペクトラム症の特性と支援に関する内容とした。講義内容は、①**発達障害のある子の行動の特徴**(こだわり、衝動性、人との関わり方の苦手さ、パニック、感覚の過敏さ、独特な興味関心、不器用さ等)、②**障害に関する知見**(自閉症の定義、診断基準、有病率、自閉症の評価について、実行機能、共同注視、感覚調整、感情のコントロール、注意・記憶等)、③**支援方法**(アセスメント、環境調整、特別な支援や指導の例、家族に対する支援、地域連携等)であった。1回目の研修会は、平日18:00から、1時間半程度行った。

1回目の研修会の2週間後に2回目の研修会を行った。2回目の研修会では、発達障害の支援方法についての講義を行った。講義内容は、①**支援で重要な考え方**(アセスメントに基づいた支援、本人の困り感への配慮、成功体験の重要性、興味関心の活用、社会性の支援、ほめることの重要性、スモールステップの支援、一貫した対応の重要性等)、②**子どもに対する接し方や支援方法**(叱らず適切な行動を分かりやすく伝える、適切な指示の方法、わかりやすく安心できる環境設定、感覚面に配慮した支援、パニック時の対応、遊びにおける配慮の方法等)、③**専門的支援技術**(ABC分析の

方法、視覚的構造化、スケジュールの利用方法等)、④**家族や他機関との連携の仕方**であった。2回目の研修会は、平日18:00に開始し、2時間半程度行った。

各研修会とも、それぞれの保育所で実施し、全ての常勤保育士を対象とした。

2.5. 訪問支援の内容

訪問支援は、事前に対象となる子どもを園長に挙げてもらい、その子どもについて事前書類を提出してもらってから、行動の観察を行った。観察は2～3名の担当者が行った。その後、担当者間で課題となる行動の原因と対応について検討し、1ヶ月後に報告会を行った。報告会は、保育所の状況をみて18:00前後から開始し、1時間半から2時間半程度行った。報告会の内容は、まず全参加者に対して、観察時の子どもの様子、行動の原因の分析、対応方法についての報告、主要な相談に対する応答を30分～1時間程度行った。その後、各クラスに分かれて、環境設定の方法、スケジュール等の視覚的支援の方法等について、個別のケースの応じた相談、助言を1時間程度行った。また報告会に参加できない職員もいたが、各園、各クラスにおいてミーティングや会議の際に職員間で情報の共有をしてもらった。各園とも訪問支援(観察・報告会)を4回行った。

3. 結果

3.1. 回収状況

1回目調査では、A園16名(100%)、B園22名(91.7%)から回答があった。2回目調査では、A園13名(81.3%)、B園21名(88%)から回答があった。3回目調査では、A園13名(81.3%)、B園20名(83.3%)から回答があった。

「保育士の支援に関するアンケート」「子どもの行動・支援における困難さに関するアンケート」の結果の集計においては、すべての調査回において回答の得られた31名の回答を有効回答とした。また「支援の実態に関するアンケート」の集計においては、対象となる2～5歳児の担任で、すべての調査回において回答の得られた対象者13名に限って分析を行った。なお、各対象者の研修会、訪問支援の報告会への出欠の確認は行っていなかった。研修会、訪問支援の報告会に欠席した対象者もいたが、概ね全職員の参加が得られたため、対象者が全員参加したと考えて分析した場合、各アンケート結果の全体的傾向への影響は少ないであろうと判断し、上記の対象者の回答すべてを分析の対象とした。

3.2. フェイスシートの結果

対象者のフェイスシートの結果を表1に示す。

3.3. 各アンケートの結果

3.3.1. 「保育士の支援に関するアンケート」の結果

調査回ごとの各項目の回答の割合を図1に示した。分析にあたっては、一回目調査を基準として、回答「4 - 少し当てはまる」「5 - とても当てはまる」の割合を合算した値の変化に注目し、20%以上の増加が見られた項目、10%以上20%未満の増加が見られた項目を表2に示した。

さらに、上記の項目について、対象者を保育士歴により33パーセンタイルごとに保育士歴低群（0～4年、n=9）、中群（6～12年、n=9）、高群（14年以上、n=10）の3群に分けて分析した。群間で異なる傾向がみられた項目を図2～図9に示した。

3.3.2. 「子どもの行動・支援における困難さに関するアンケート」の結果

調査回ごとの各項目の回答の割合を図10に示した。本アンケートにおいても、一回目調査を基準として、回答「4 - 少し当てはまる」「5 - とても当てはまる」の割合を合算した値の変化に注目し、10%以上20%未満の減少が見られた項目、10%以上増加した項目を表3に示した。

さらに、上記の項目について、保育士歴低群・中群・高群で比較し、群間の異なる傾向が見られた項目を図11～図13に示した。

3.3.3. 「支援の実態に関するアンケート」

調査回ごとの各項目の回答の割合を図14に示した。本アンケートにおいても、一回目調査を基準として、回答「4 - 少し当てはまる」「5 - とても当てはまる」の割合を合算した値の変化に注目する。本アンケートにおいては、対象者を2～5歳児の担任としたため回答数は13名と他のアンケートよりも比較的少なくなった。そのため1名分の回答の影響がより強くなることから、一回目調査から20%以上の増加の見られた項目に注目し、該当する項目を表4に示した。なお、本アンケートでは、対象者数が少ないことから、他のアンケートのような群間の比較は行わなかった。

表1 フェイスシート結果

	度数	パーセント	
役職	担任	28 73.7	
	フリー	5 13.2	
	主任	2 5.3	
	園長	1 2.6	
	加配	1 2.6	
	その他	1 2.6	
担当クラス	0歳児クラス	6 15.8	
	1歳児クラス	6 15.8	
	2歳児クラス	6 15.8	
	3歳児クラス	2 5.3	
	4歳児クラス	2 5.3	
	5歳児クラス	2 5.3	
担当経験人数	異年齢	8 21.1	
	その他	6 15.8	
	0人	7 18.4	
	1～5人	19 50.0	
	6～10人	3 7.9	
	11～20人	6 15.8	
性別	21人以上	2 5.3	
	その他	1 2.6	
	女	37 97.4	
	男	1 2.6	
	研修の機会	大学、短大等の授業	27 71.1
		職員研修	17 44.7
自主研修		13 34.2	
発達障害関連の書籍		25 65.8	
保育雑誌		11 28.9	
職員や知人からの情報		15 39.5	
ボランティア		4 10.5	
実習		9 23.7	
その他		1 2.6	
	度数	平均値 (標準偏差)	
クラスで発達障害のある子どもの人数(人)	23	1.09 (1.08)	
クラスで発達障害の疑いのある子どもの人数(人)	28	1.57 (1.85)	
保育士歴	35	9.54 (8.57)	
年齢	38	32.21 (10.17)	

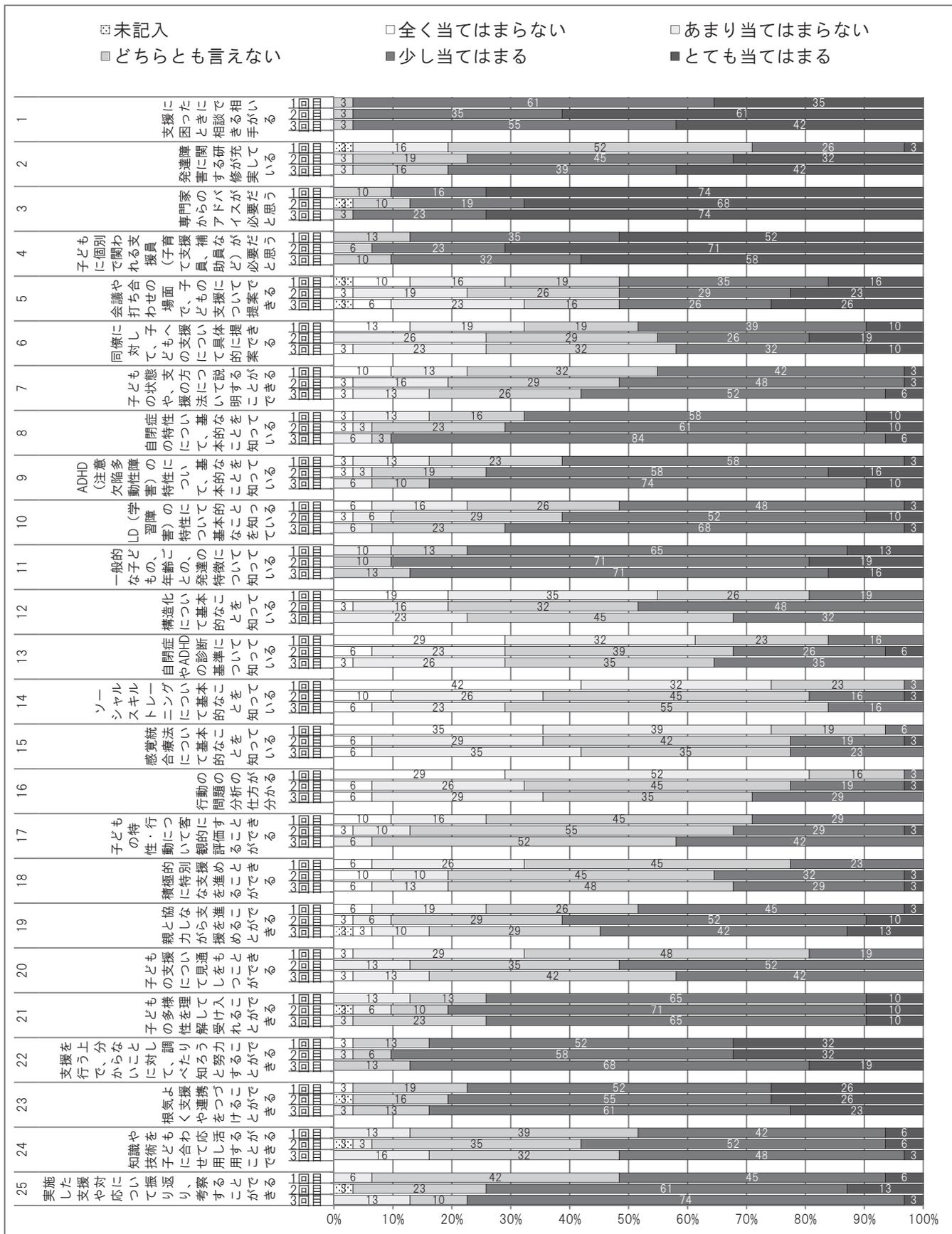


図1 「保育士の支援に関するアンケート」の結果

表2 「保育士の支援に関するアンケート」で変化のあった項目

	回答「4」「5」の割合		
	1回目	2回目 ()内は1回目との差	3回目 ()内は1回目との差
2 発達障害に関する研修が充実している	29.0%	77.4% (+48.4%)	80.6% (+51.6%)
7 子どもの状態や、支援の方法について説明することができる	45.2%	51.6% (+6.5%)	58.1% (+12.9%)
8 自閉症の特性について、基本的なことを知っている	67.7%	71.0% (+3.2%)	90.3% (+22.6%)
9 ADHD (注意欠陥多動性障害) の特性について、基本的なことを知っている	61.3%	74.2% (+12.9%)	83.9% (+22.6%)
10 LD (学習障害) の特性について基本的なことを知っている	51.6%	61.3% (+9.7%)	71.0% (+19.4%)
11 一般的な子どもの、年齢ごとの、発達の特徴について知っている	77.4%	90.3% (+12.9%)	87.1% (+9.7%)
12 構造化について基本的なことを知っている	19.4%	48.4% (+29.0%)	32.3% (+12.9%)
13 自閉症や ADHD の診断基準について知っている	16.1%	32.3% (+16.1%)	35.5% (+19.4%)
14 ソーシャルスキルトレーニングについて基本的なことを知っている	3.2%	19.4% (+16.1%)	16.1% (+12.9%)
15 感覚統合療法について基本的なことを知っている	6.5%	22.6% (+16.1%)	22.6% (+16.1%)
16 行動の問題の分析の仕方が分かる	3.2%	22.6% (+19.4%)	29.0% (+25.8%)
17 子どもの特性・行動について客観的に評価することができる	29.0%	32.3% (+3.2%)	41.9% (+12.9%)
18 積極的に特別な支援を進めることができる	22.6%	35.5% (+12.9%)	32.3% (+9.7%)
19 親と協力しながら支援を進めることができる	48.4%	61.3% (+12.9%)	54.8% (+6.5%)
20 子どもの支援について見通しをもつことができる	19.4%	51.6% (+32.3%)	41.9% (+22.6%)
25 実施した支援や対応について振り返り、考察することができる	51.6%	74.2% (+22.6%)	77.4% (+25.8%)

■ は +20%以上、□ は +10%以上 20%未満の変化

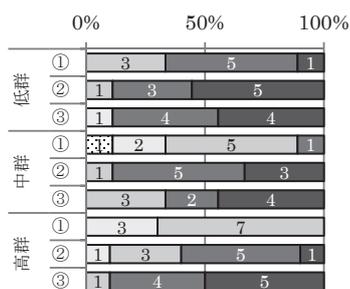


図2 (2)発達障害に関する研修が充実している※

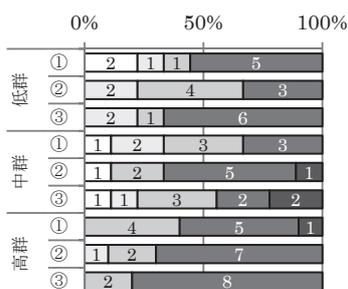


図3 (7)子どもの状態や、支援の方法について説明することができる※

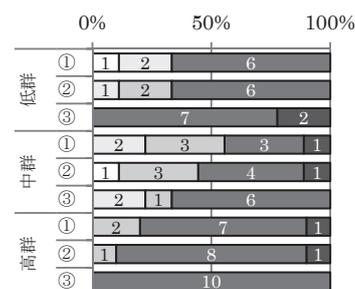


図4 (8)自閉症の特性について、基本的なことを知っている※

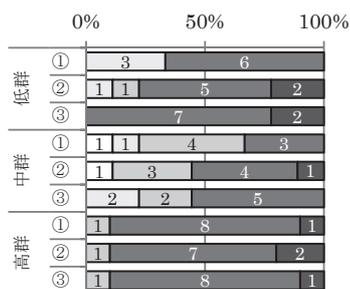


図5 (9)ADHD (注意欠陥多動性障害) の特性について、基本的なことを知っている※

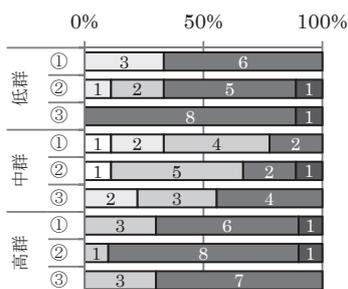


図6 (10)LD (学習障害) の特性について基本的なことを知っている※

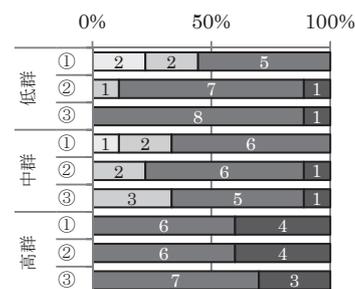


図7 (11)一般的な子どもの、年齢ごとの、発達の特徴について知っている※

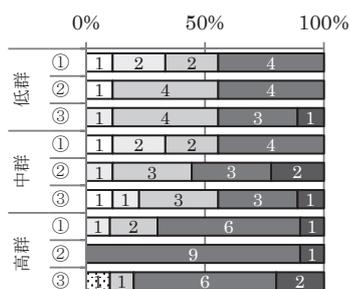


図8 (19)親と協力しながら支援を進めることができる※

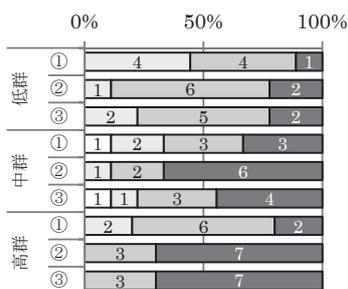


図9 (20)子どもの支援について見通しをもつことができる※

※図2～9のグラフ内の数字は度数(人)を表す。①～③は調査回を表す。凡例は、図1と同じである。

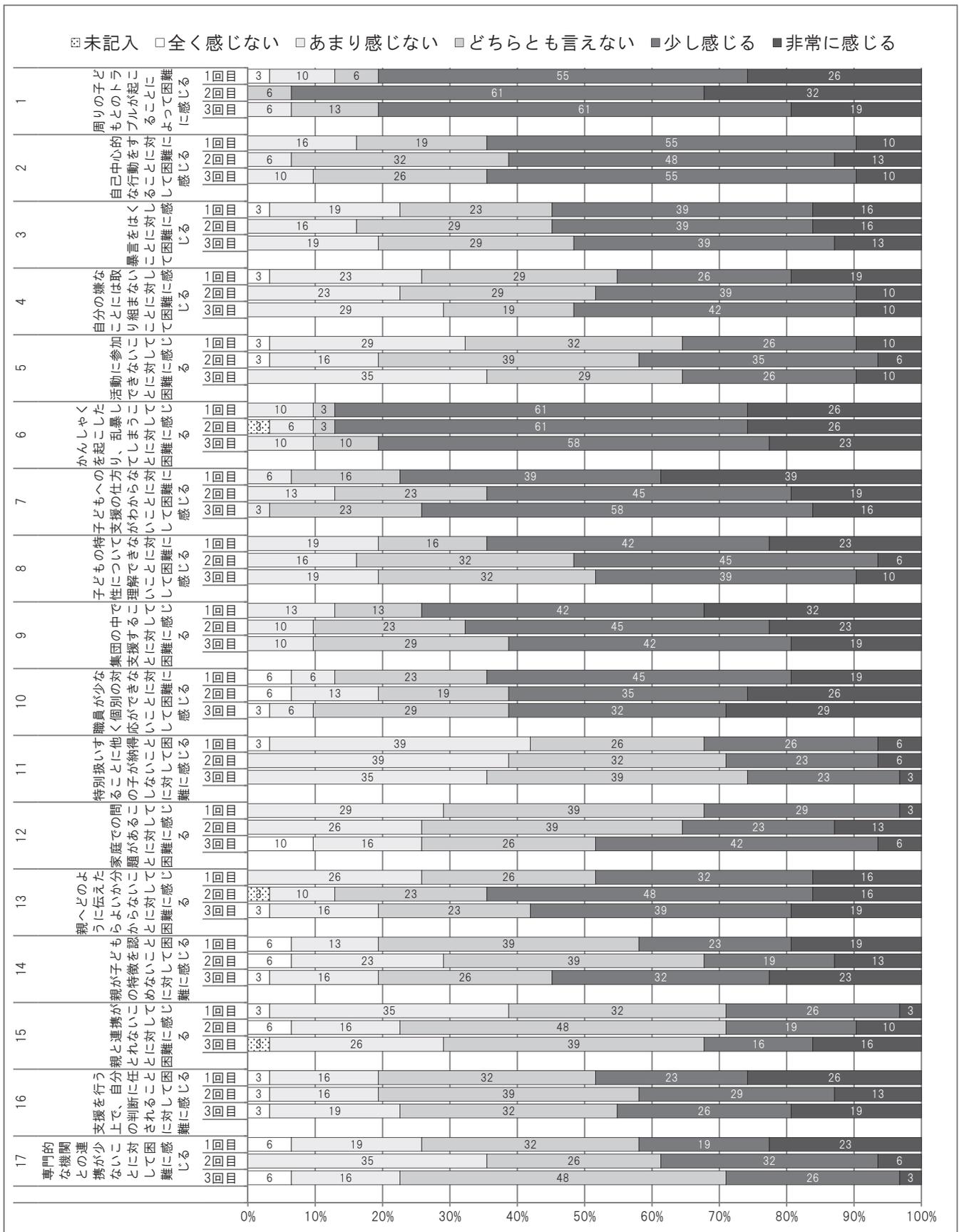


図 10 「子どもの行動・支援における困難さに関するアンケート」の結果

表3 「子どもの行動・支援における困難さに関するアンケート」で変化のあった項目

	回答「4」「5」の割合		
	1回目	2回目 ()内は1回目との差	3回目 ()内は1回目との差
1 周りの子どもとのトラブルが起こることによって困難を感じる	80.6%	93.5% (+12.9%)	80.6% (0.0%)
7 子どもへの支援の仕方がわからないことに対して困難を感じる	77.4%	64.5% (-12.9%)	74.2% (-3.2%)
8 子どもの特性について理解できないことに対して困難を感じる	64.5%	51.6% (-12.9%)	48.4% (-16.1%)
9 集団の中で支援することに対して困難を感じる	74.2%	67.7% (-6.5%)	61.3% (-12.9%)
12 家庭での問題があることに対して困難を感じる	32.3%	35.5% (+3.2%)	48.4% (+16.1%)
13 親へどのように伝えたらよいか分からないことに対して困難を感じる	48.4%	64.5% (+16.1%)	58.1% (+9.7%)
14 親が子どもの特徴を認めないことに対して困難を感じる	41.9%	32.3% (-9.7%)	54.8% (+12.9%)
17 専門的な機関との連携が少ないことに対して困難を感じる	41.9%	38.7% (-3.2%)	29.0% (-12.9%)

■ は-10%以上、□ は+10%以上の変化

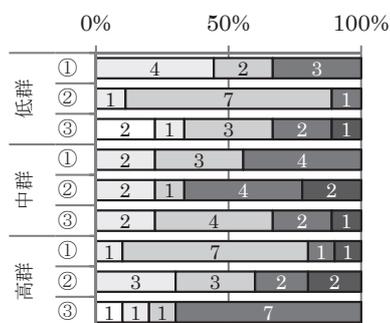


図11 (12) 家庭での問題があることに対して困難を感じる ※※

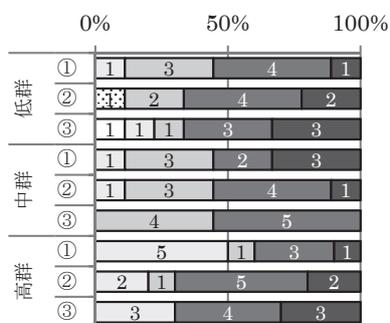


図12 (13) 親へどのように伝えたらよいか分からないことに対して困難を感じる ※※

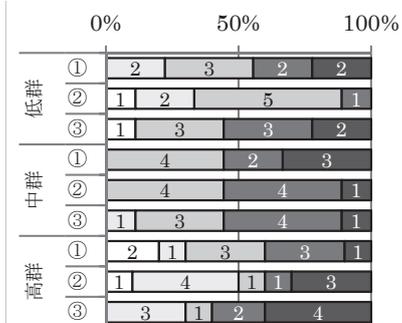


図13 (14) 親が子どもの特徴を認めないことに対して困難を感じる ※※

※※図11～13のグラフ内の数字は度数(人)を表す。①～③は調査回を表す。凡例は、図10と同じである。

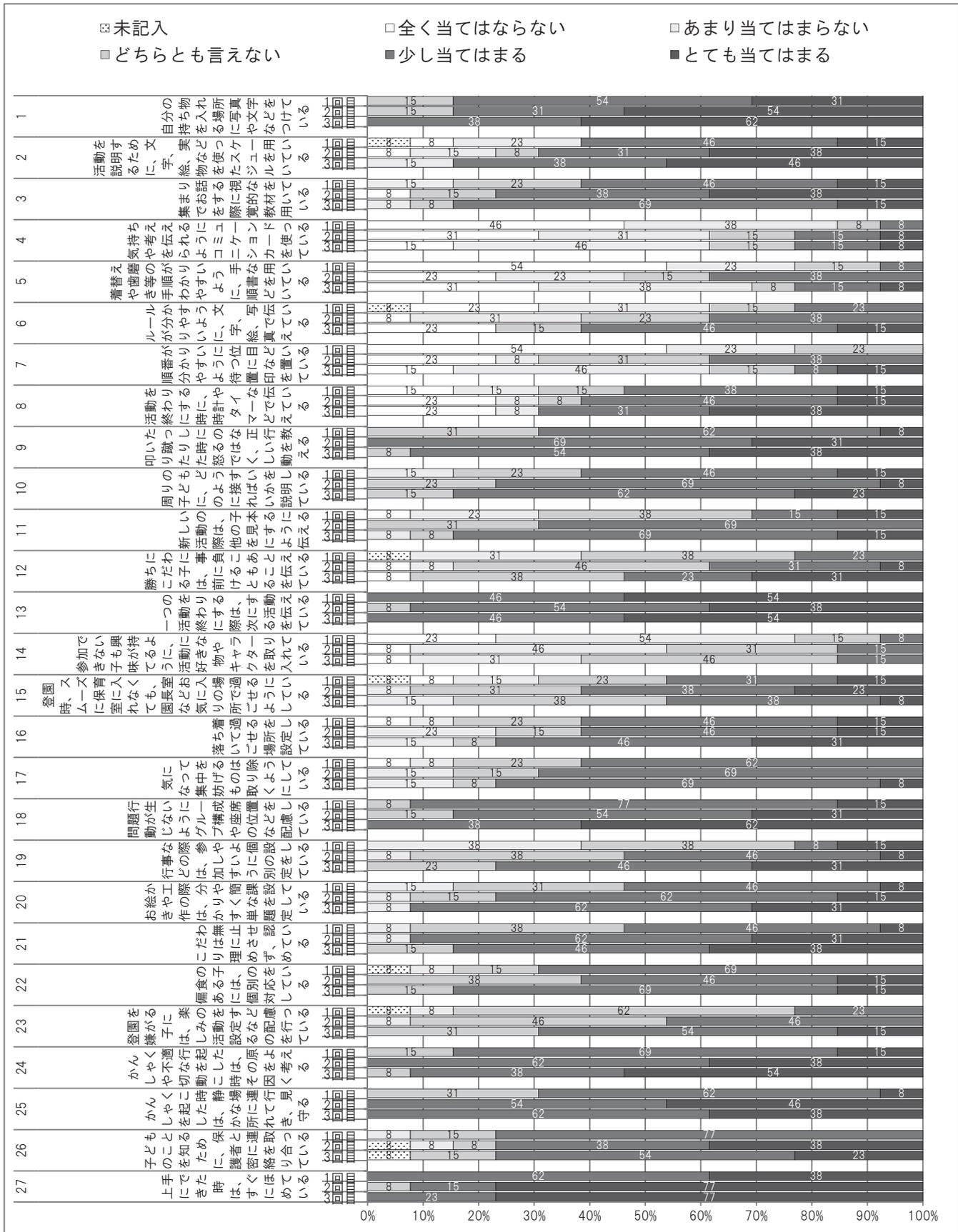


図 14 「支援の実態に関するアンケート」の結果

表4 「支援の実態に関するアンケート」で変化のあった項目

	回答「4」「5」の割合		
	1回目	2回目 ()内は1回目との差	3回目 ()内は1回目との差
2 活動を説明するために、文字、絵、実物などを使ったスケジュールを用いている	61.5%	69.2% (+7.7%)	84.6% (+23.1%)
3 集まりでお話をする際に視覚的な教材を用いている	61.5%	76.9% (+15.4%)	84.6% (+23.1%)
5 着替えや歯磨き等の手順がわかりやすいように、手順書などを用いている	7.7%	38.5% (+30.8%)	23.1% (+15.4%)
6 ルールがわかりやすいように、文字、絵、写真で伝えている	23.1%	38.5% (+15.4%)	61.5% (+38.5%)
7 順番がわかりやすいように待つ位置に目印などを置いている	0.0%	38.5% (+38.5%)	23.1% (+23.1%)
9 叩いたり蹴ったりした時に怒るのではなく、正しい行動を教える	69.2%	100.0% (+30.8%)	92.3% (+23.1%)
10 周りの子どもに、どのように接すればいいかを説明している	61.5%	76.9% (+15.4%)	84.6% (+23.1%)
11 新しい活動の際は、他の子を見本にするように伝える	30.8%	69.2% (+38.5%)	84.6% (+53.8%)
12 勝ちにこだわる子には、事前に負けることもあることを伝えている	23.1%	38.5% (+15.4%)	53.8% (+30.8%)
19 行事などの際は、参加しやすくように個別の設定をしている	23.1%	53.8% (+30.8%)	76.9% (+53.8%)
20 お絵かきや工作の際は、わかりやすく簡単な課題を設定している	53.8%	76.9% (+23.1%)	92.3% (+38.5%)
21 こだわりは無理に止めさせず、認めている	53.8%	92.3% (+38.5%)	84.6% (+30.8%)
23 登園を嫌がる子には、楽しみの活動を設定するなどの配慮を行っている	23.1%	46.2% (+23.1%)	69.2% (+46.2%)
25 かんしゃくを起こした時は、静かな場所に連れて行き、見守る	69.2%	100.0% (+30.8%)	100.0% (+30.8%)

■ は+20%以上の変化

4. 考察

4.1. 専門性について

「保育士の支援に関するアンケート」の結果において、研修会・訪問支援により向上する傾向が見られた項目は、研修の充実に関する項目(2)、発達障害特性の知識に関する項目(8、9、10)、子どもの発達に関する項目(11)、専門的な支援技術の知識に関する項目(12、14、15、16)、支援の見通しに関する項目(20)、子どもや支援の説明に関する項目(7)、親との協力に関する項目(19)にあった。

研修の充実(2)については、研修会・訪問支援を行ったことにより、評価が高まったものと思われる。保育士歴の群間で比較した時、中・高群において向上する傾向が顕著であった。中・高群では、1回目の調査において、研修が充実していると答える回答者は少なかったことから、保育士歴が長くなると研修を受ける機会は限定されているものと考えられる。

発達障害特性の知識(8、9、10)については、回を重ねるごとに向上する傾向が見られた。研修会での障害特性の講義により知識を習得したことに加え、訪問支援で個別のケースについて検討することで理解を深められたものと考えられる。保育士歴の群間では、低・中群において向上する傾向が顕著であった。一方、高群においては調査開始時から、すでにある程度の理解が得られていることがうかがわれた。同様な傾向が、子どもの発達に関する知識(11)においても見られ、高群の保育士にとっては既知の内容であると思われる。

た。このことから、発達障害特性や子ども発達の知識については、保育士歴が比較的短い職員を対象に研修を行うと効果が高いと言えよう。

専門的な支援技術の知識(12、14、15、16)についても向上する傾向が見られた。それらは構造化、SST、感覚統合療法、行動の分析といった内容であった。その内、行動の分析(16)については、研修会、訪問支援を重ねるごとに向上する傾向がみられた。研修会においてはABC分析について取り上げ、さらに訪問支援において行動の問題への対応について検討された結果であると考えられる。また行動の問題は、保育において身近で重要な課題であるため、行動分析はより実践的な知識であり、習得が進んだものと考えられる。SST、感覚統合療法(14、15)に関する項目では、やや向上する傾向が見られたが、訪問支援による影響は認められなかった。研修会において、社会性の支援、感覚面に配慮した支援として取り上げられたため、知識として習得されたと考えられる。構造化の知識(12)については、研修会後に大きく向上したが、その後はやや減退する傾向がみられた。研修会において、環境設定、視覚的構造化として取り上げられたことにより効果があったと考えられる。その後の訪問支援においても、環境設定について取り上げられたが、研修会の効果を十分に維持することができなかった。その原因の一つとして、研修会により知識として習得されたものの、訪問支援における実践の場では活用できなかった可能性がある。今後さらなる検証が必要とされる。

つづいて、支援の見通し(20)、子どもや支援について説明(7)、親との協力(19)については、保育士歴高群において向上する傾向がみられた。これらは経験豊富な保育士に期待できる効果であると考えられる。研修会・訪問支援により保育士の豊富な経験が統合され、支援の見通しと子どもや支援についての説明する力が向上したと考えられる。また親との協力に関しても、保護者の対応を行うのはベテランの職員が中心であることから、高群にとって効果が高まったと考えられる。

今回の結果から、研修会により、発達障害特性や支援方法の知識の向上に一定の効果があると考えられた。さらに訪問支援によって発達障害特性の理解を深めるとともに、行動分析といった実用的な支援の知識の向上が期待できると考えられた。発達障害者支援センター、児童発達支援センター等の専門機関や各自治体が積極的に研修会・訪問支援を実施していくことが保育士の専門性向上に必要であろう。

しかし、原口^[10]は、研修について、実施回数を単に増やすことは保育者への負担を増やすおそれがあると指摘している。保育者への負担を増加させないためにも、研修会、訪問支援を効果的に進める必要がある。対象者の特徴やニーズに合わせて、経験の短い保育士には発達障害特性に関する研修、経験豊富な保育士には保護者支援についての研修を実施するなど、効果的な研修を実施する必要があるだろう。

4.2. 困難さについて

「子どもの行動・支援における困難さに関するアンケート」の結果からは、研修会後・訪問支援後ともに大きな変化はみられなかった。やや困難さが減少した項目としては、子どもの特性理解の困難さに関する項目(8)、集団の中での支援の困難さに関する項目(9)、専門機関との連携不足による困難さに関する項目(17)であった。

特性理解の困難さ(8)については、上述のように、研修会・訪問支援によって発達障害特性に関する知識が獲得されたことにより、困難さの軽減につながったと考えられる。集団の中での支援の困難さ(9)、専門機関との連携不足の困難(17)については、訪問支援後に軽減する傾向がみられ、講義のみによっては困難さへの影響は少ない。実際に訪問支援によって協力して支援を進めることにより、支援上の困難さや、連携不足感は減少することが示唆された。しかし支援方法の理解の困難さ(7)は、研修会により減少した

ものの、その後は元の水準に戻っている。同様の傾向は前述の「構造化の知識」においても見られている。支援方法の知識を習得することと、それを活用することには隔たりがあり、実用にあたっては困難さが感じられたと思われる。

一方、困難さが増加する傾向が見られた項目として、子ども間のトラブルの困難さ(1)、保護者との関わりの困難さ(12、13、14)が挙げられる。保護者との関わりの困難さ(12、13、14)については、保育士歴群間で比較すると、高群で困難さが上昇する傾向がみられた。ベテランの職員が親と協力できるようになったことを前述したが、それに伴い保護者との関わりの中で困難さが増加したと考えられる。子ども間のトラブルの困難さ(1)は、研修会後に一時増加し、その後元の水準に減少している。この変化に対する解釈の一つとしては、一時的に実際のトラブルが増加したことが考えられる。子どもの行動の問題に対しては、困難に感じる程度が高い傾向がある。研修会・訪問支援において行動の問題に対する援助を強調する必要があるだろう。

今回の困難さに関する調査では、大きくに困難さが軽減した項目は見みられず、やや軽減することがうかがわれたり、逆にやや増加する項目もあった。このことから研修会・訪問支援によって支援の困難さが劇的に減少するということは考えがたい。発達障害の支援においては対応の難しさや行動の問題に対する困惑等は一定程度併存するものであろう。そのようなことを理解しつつ、研修や訪問支援により保育士を支えることで、円滑に支援を進めていく必要があると考える。

4.3. 支援の実態について

「支援の実態に関するアンケート」の結果の特徴を見ると、視覚的な支援の実施に関する項目(2、3、5、6、7)、対応の工夫の実施に関する項目(9、11、12、21、25)、個別設定の実施に関する項目(19、20、23)において、支援の実施が向上する傾向が見られた。研修会後に支援の実施が増える項目もあるが、特に訪問支援後に向上する傾向が強い。このことから、支援を実施する上で、訪問支援のように相談・助言ができる機会があることが重要であると言えるだろう。

視覚的な支援(2、3、5、6、7)については、研修会において、環境設定、視覚的構造化、スケジュールによる支援として講義され、訪問支援においては各クラスの状況に合わせて、視覚的な支援についての助言を行った。そのため、これらの支援が実施される程度が高まったと考える。スケジュールや視覚的教材の使

用は、研修会・訪問支援を実施する以前からある程度実施されていたが、発達障害の子どもに合った利用方法でないこともあるだろう。発達障害の子どもに合わせた利用方法について助言することの意義は大きいと考える。

対応の工夫の実施（9、11、12、21、25）については、適切な行動の伝え方や指示の出し方、こだわりへの対応など、子どもとの接し方に関する内容が含まれる。これらは他の支援内容と異なり、物理的な支援ではなく、保育士自身の行動による支援である。研修会・訪問支援により保育士の子どもに対する行動が変容したと考えられる。

子どもに合わせた設定（19、20、23）としては、行事に参加するための個別の配慮や、工作における課題の調整などが含まれる。これらは子どもの特徴や発達に合わせて行う必要があり、研修会のみではなく、訪問支援により子どもの状況にあった支援方法を提案したことが重要であったと考える。

以上のようなことから、研修会・訪問支援を実施が、支援の実施の向上に有効であると言えよう。また、研修会による知識の習得だけでなく、訪問支援により実際の支援の向上につながった意義は大きい。特に、訪問支援によって個別のケースにあわせた支援の提案が行われたことは支援実施のために重要であると考えられる。藤原^[5]の研究においても、知識の習得だけでなく実践をモデルに学習することの意義について述べられており、知識習得のための研修会と、実践型の学習としての訪問支援をセットにして支援実施の向上を図ることが効果的であろう。そのためにも専門機関が、研修会、訪問支援を実施していき、保育所での支援を援助していくことが望まれる。

5. まとめ

研修会・訪問支援を実施したことにより、発達障害の特性・支援に対する知識の向上、支援の実施の向上につながる傾向を示すことができた。特に研修会により発達障害の特性、支援に対する知識の向上が期待され、訪問支援により支援の実施の向上が期待される。また保育士歴によって専門性の向上する内容が異なり、経験にあった研修の必要性が示唆させた。今後の保育所での発達障害支援を進める上で、研修会・訪問支援が重要な役割を果たすと考えられ、各自治体の保育行政や発達障害者支援センター等の専門機関による研修等の実施が望まれる。

6. 本研究の課題

第一に、評価に用いたアンケートの妥当性の問題が挙げられる。保育士の発達障害に関する専門性、困難さ、支援の実態の評価に見合った評価尺度が見当たらなかったことから独自のアンケートを作成したが、統計的な検証など、妥当性の検証は行っていない。この問題に対応するために、適切な評価尺度を構成し、他の保育士の専門性等の指標との関連を調査するなど、妥当性の検証を行う必要がある。

第二に、サンプル数の問題が挙げられる。特に「支援の実態に関するアンケート」では、対象を絞ったことから十分なサンプル数が得られなかった。さらに対象者数を増やし上記の問題とともに検証する必要がある。

第三に、研修会、訪問支援の報告会への参加者を正確に把握できなかったことが挙げられる。研修会、訪問支援の報告会には概ね全職員が参加したため、全ての回答を分析の対象としたが、対象には研修会、訪問支援の報告会に欠席した者も含まれている。研修会、訪問支援の報告会への参加状況について調査回ごとに確認し、参加の有無を区別して分析し、効果測定の精度を高める必要がある。

謝辞

本研究にご協力いただきました A、B 園の職員の皆様には多大な労力とお時間を頂戴いたしました。この場を借りて心よりお礼申し上げます。

7. 引用文献

- 1) 郷間英世, 圓尾奈津美, 宮地知美, 池田友美, 郷間安美子. 幼稚園・保育園における「気になる子」に対する保育上の困難さについての調査研究. 京都教育大学紀要, 113, 2008, p.81-89.
- 2) 本郷一夫, 澤江幸則, 鈴木智子, 小泉嘉子, 飯島典子. 保育所における「気になる」子どもの行動特徴と保育者の対応に関する調査. 発達障害研究, 25(1), 2003, p.50-61.
- 3) 平澤紀子, 藤原義博, 山根正夫. 保育所・園における「気になる・困っている行動」を示す子どもに関する調査研究: 障害群からみた該当児の実態と保育者の対応および受けている支援から. 発達障害研究, 26(4), 2005, p.256-267.
- 4) 久保山茂樹, 齊藤由美子, 西牧謙吾, 當島茂登, 藤井茂樹, 滝川国芳. 「気になる子ども」「気になる保護者」についての保育者の意識と対応に関する

調査．国立特別支援教育総合研究所研究紀要，36，2009，p.55-75.

- 5) 藤原里美．発達障害児への保育実践能力に関する研究：専門機関の実践研修を受講した研修生の視点から（第1部く特集論文）保育と特別支援）．保育学研究，51(3)，2013，p.343-354.
- 6) 大塚類．「気になる子ども」に対する保育者の専門性．千葉大学教育学部研究紀要，60，2012，p.177-181.
- 7) 佐藤暁．絵でわかる自閉症児の困り感に寄り添う保育．学研教育出版．2010.
- 8) 杉山登志郎，辻井正次．発達障害のある子どもができることを伸ばす！／幼児編．日東書院．2011.
- 9) 内山登紀夫，諏訪利明，安倍陽子．こんなとき、どうする？発達障害のある子への支援 幼稚園・保育園．ミネルヴァ書房．2009.
- 10) 原口英之，野呂文行，神山努．保育所における特別な配慮を要する子どもに対する支援の実態と課題．障害科学研究．37，2013，p.103-114.

添付資料

<p>保育園での役職で、当てはまるものに○を付けてください。</p> <p style="text-align: center;">担任 ・ フリー ・ 主任 ・ 園長 ・ 加配 ・ その他 ()</p>	
<p>クラスの園児の構成で、当てはまるものに○を付け、ご記入ください。</p> <p>園児の構成 (<input type="checkbox"/> 歳児クラス ・ 異年齢 ・ その他)</p>	
<p>クラスの中に発達障害やその疑いのある子どもはどの程度いますか。人数をお答えください。ご自身が思われる人数で結構です。</p> <p>発達障害のある子ども : <input type="checkbox"/> 人 その疑いのある子ども : <input type="checkbox"/> 人</p>	
<p>保育士として勤務された合計年数を、「保育士歴」の欄にご記入ください。</p> <p>また、今までに担任・担当をした発達障害やその疑いのある子の合計人数を選択肢に○をつけてお選びください。</p> <p>保育士歴 : <input type="checkbox"/> 年 担任・担当した合計人数 :</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin-left: auto; margin-right: auto;"> <p>1、0人</p> <p>2、1～5人</p> <p>3、6～10人</p> <p>4、10人～20人</p> <p>5、20人以上</p> </div>	
<p>年齢をご記入ください。</p> <p>年齢 : <input type="checkbox"/> 歳</p>	<p>性別に○をつけてください。</p> <p>性別 : (男 ・ 女)</p>
<p>発達障害（自閉症・ADHD・学習障害など）について、勉強や研修されたことのある方は、当てはまるものに、○を付けてお答えください。（複数回答可）</p> <p>大学、短大等の授業 ・ 職員研修 ・ 自主研修 ・</p> <p>発達障害の本 ・ 保育雑誌 ・ 職員や知人からの情報 ・</p> <p>ボランティア ・ 実習 ・ その他 ()</p>	

保育者の支援に関するアンケート

このアンケートでは、発達障害やその疑いのある子どもに対する保育者の支援について、お尋ねします。

以下の項目に対して、ご自分がどの程度当てはまるかをお答えください。

1—全くあてはまらない、2—あまり当てはまらない、3—どちらとも言えない、4—少し当てはまる、5—とても当てはまる、の中から、ひとつに○をつけてください

番号	項目	全く 当てはまらない	あまり 当てはまらない	どちらとも 言えない	少し 当てはまる	とても 当てはまる
1	支援に困ったときに相談できる相手がいる	1	2	3	4	5
2	発達障害に関する研修が充実している	1	2	3	4	5
3	専門家からのアドバイスが必要だと思う	1	2	3	4	5
4	子どもに個別で関わられる支援員(子育て支援員、補助員など)が必要だと思う	1	2	3	4	5
5	会議や打ち合わせの場面で、子どもの支援について提案できる	1	2	3	4	5
6	同僚に対して、子どもへの支援について具体的に提案できる	1	2	3	4	5
7	子どもの状態や、支援の方法について説明することができる	1	2	3	4	5
8	自閉症の特性について、基本的なことを知っている	1	2	3	4	5
9	ADHD(注意欠陥多動性障害)の特性について、基本的なことを知っている	1	2	3	4	5
10	LD(学習障害)の特性について基本的なことを知っている	1	2	3	4	5
11	一般的な子どもの、年齢ごとの、発達の特徴について知っている	1	2	3	4	5
12	自閉症やADHDの診断基準について知っている	1	2	3	4	5
13	構造化について基本的なことを知っている	1	2	3	4	5
14	ソーシャルスキルトレーニングについて基本的なことを知っている	1	2	3	4	5
15	感覚統合療法について基本的なことを知っている	1	2	3	4	5
16	行動の問題の分析の仕方が分かる	1	2	3	4	5
17	子どもの特性・行動について客観的に評価することができる	1	2	3	4	5
18	積極的に特別な支援を進めることができる	1	2	3	4	5
19	親と協力しながら支援を進めることができる	1	2	3	4	5

20	子どもの支援について見通しをもつことができる	1	2	3	4	5
21	子どもの多様性を理解して受け入れることができる	1	2	3	4	5
22	支援を行う上で、分からないことに対して、調べたり知ろうと努力することができる	1	2	3	4	5
23	根気よく支援や連携をつづけることができる	1	2	3	4	5
24	知識や技術を子どもに合わせて応用し活用することができる	1	2	3	4	5
25	実施した支援や対応について振り返り、考察することができる	1	2	3	4	5

子どもの行動・支援における困難さに関するアンケート

このアンケートでは、発達障害やその疑いのある子どもの保育を行う際に、どのようなことを困難に感じるかをお尋ねします。

以下の「子どもの行動に対する困難さ」「支援における困難さ」の項目に対して、ご自分がどの程度、困難に感じるかをお答えください。

1—全く感じない、2—あまり感じない、3—どちらとも言えない、4—少し感じる、5—非常に感じる、の中から、ひとつに○をつけてください

1、子どもの行動に対する困難さ

番号	項目	全く感じない	あまり感じない	どちらとも言えない	少し感じる	非常に感じる
1	周りの子どもとのトラブルが起こることによって困難を感じる	1	2	3	4	5
2	自己中心的な行動をすることに対して困難を感じる	1	2	3	4	5
3	暴言をはくことに対して困難を感じる	1	2	3	4	5
4	自分の嫌なことには取り組まないことに対して困難を感じる	1	2	3	4	5
5	活動に参加できないことに対して困難を感じる	1	2	3	4	5
6	かんしゃくを起こしたり、乱暴してしまうことに対して困難を感じる	1	2	3	4	5

2、支援における困難さ

番号	項目	全く感じない	あまり感じない	どちらとも言えない	少し感じる	非常に感じる
7	子どもへの支援の仕方がわからないことに対して困難を感じる	1	2	3	4	5
8	子どもの特性について理解できないことに対して困難を感じる	1	2	3	4	5
9	集団の中で支援することに対して困難を感じる	1	2	3	4	5
10	職員が少なく個別の対応ができないことに対して困難を感じる	1	2	3	4	5
11	特別扱いすることに他の子が納得しないことに対して困難を感じる	1	2	3	4	5
12	家庭での問題があることに対して困難を感じる	1	2	3	4	5
13	親へどのように伝えたらよいか分からないことに対して困難を感じる	1	2	3	4	5
14	親が子どもの特徴を認めないことに対して困難を感じる	1	2	3	4	5
15	親と連携がとれないことに対して困難を感じる	1	2	3	4	5
16	支援を行う上で、自分の判断に任されることに対して困難を感じる	1	2	3	4	5
17	専門的な機関との連携が少ないことに対して困難を感じる	1	2	3	4	5

支援の実態に関するアンケート

このアンケートは、現在、2～5歳児の担任、担当をされている方にお伺いいたします。

このアンケートでは、ご自身が保育において、発達障害やその疑いのある子どもにどのような支援をしているかをお尋ねします。

以下の項目に対して、ご自分がどの程度当てはまるかをお答えください。

1—全く当てはまらない、2—あまり当てはまらない、3—どちらとも言えない、4—少し当てはまる、5—とても当てはまる、の中から、ひとつに○をつけてください。

番号	項目	全く 当てはまら ない	あまり 当てはまら ない	どちらとも 言えない	少し 当てはまる	とても 当てはまる
1	自分の持ち物を入れる場所に写真や文字などをつけている	1	2	3	4	5
2	活動を説明するために、文字、絵、実物などを使ったスケジュールを用いている	1	2	3	4	5
3	集まりでお話をする際に視覚的な教材を用いている	1	2	3	4	5
4	気持ちや考えを伝えられるようにコミュニケーションカードを使っている	1	2	3	4	5
5	着替えや歯磨き等の手順がわかりやすいように、手順書などを用いている	1	2	3	4	5
6	ルールがわかりやすいように、文字、絵、写真で伝えている	1	2	3	4	5
7	順番がわかりやすいように待つ位置に目印などを置いている	1	2	3	4	5
8	活動を終わりにする時に、時計やタイマーなどで伝えている	1	2	3	4	5
9	叩いたり蹴ったりした時に怒るのではなく、正しい行動を教える	1	2	3	4	5
10	周りの子どもに、どのように接すればいいかを説明している	1	2	3	4	5
11	新しい活動の際は、他の子を見本にするように伝える	1	2	3	4	5
12	勝ちにこだわる子には、事前に負けることもあることを伝えている	1	2	3	4	5
13	一つの活動を終わりにする際は、次にする活動を伝えている	1	2	3	4	5
14	参加できない子も興味を持てるように、活動に好きな物やキャラクターを取り入れている	1	2	3	4	5
15	登園時、スムーズに保育室に入れなくても、園長室などお気に入りの場所で過ごせるようにしている	1	2	3	4	5
16	落ち着いて過ごせる場所を設定している	1	2	3	4	5
17	気になって集中を妨げるものは取り除くようにしている	1	2	3	4	5
18	問題行動が生じないようにグループ構成や座席の位置などを配慮している	1	2	3	4	5
19	行事などの際は、参加しやすいように個別の設定をしている	1	2	3	4	5
20	お絵かきや工作の際は、分かりやすく簡単な課題を設定している	1	2	3	4	5
21	こだわりは無理に止めさせず、認めている	1	2	3	4	5
22	偏食のある子には、個別の対応をしている	1	2	3	4	5
23	登園を嫌がる子には、楽しみの活動を設定するなどの配慮を行っている	1	2	3	4	5
24	かんしゃくや不適切な行動を起こした時は、その原因をよく考える	1	2	3	4	5
25	かんしゃくを起こした時は、静かな場所に連れて行き、見守る	1	2	3	4	5
26	子どものことを知るために、保護者と密に連絡を取り合っている	1	2	3	4	5
27	上手にできた時は、すぐにほめている	1	2	3	4	5